

自動解任を研鑽する

耳かきで飯を盛る。

杓子(しゃもじ)は耳かきにはならないと云われていますが、私は私達の周囲を眺め、これはまた耳かきで飯を盛る行いを随分、飽かずに、飽きながらも、毎日・毎月・毎年・時々刻々の分秒を、営々として、生命の燃焼に費し続けていることに気付きます。(略)

振り返って感ずるものは、その計画性の一小部面のみにも、蚕虫(カイコ)に愧(は)ずるものがあります。彼等は、すくなくとも、彼等の多くは、節をハッキリ行っている。得たものを積み、規則正しく脱皮を、そして吸収成長の期と、整理と、後の世への生命の繁栄を、画然と区分けしています。そして絹とその他のものを残しますが、人間は何時の間に何を為したか、何時まで何を何しているのか、分からないうちにハートが休みます。

とって私は蚕(カイコ)が偉くて、人間がどうだとか劣るなどと云っているものではありません。しかも、人間には虫魚禽獣の持っているものと、少しは異なったものを具えていることを認めています。が、それを用いることを成さず、また持っていることさえも知らずに唯、蚕にも及ばぬ行いに終るとは、愚かしき限りであると思うものです。

食べて、子を次代に引き継ぐのみなれば、蚕の繭に、何を以て竝(くら)ぶべき。

(「獣性より真の人間性へ」2)

○ヤマギシズム生活実顕地では、一体生活をしていくのに都合がよいように、諸事万般の調正をする「生活調正機関」を設置し、そこにすべてを任し、そこからの人的物的調正によって生活している。

半年に一度の自動解任、委し合い、専門分業、機会均等、権利義務なし、監視なし、報償なし、罪罰なし、給料なし、長なし等々の一体運営も、そうした一体の心をより豊かにするための仕組み・制度として組み立てられている。

こうした半年に一度の自動解任は、仕組み・制度として、日進月歩、日々新たなヤマギシの村づくりの適材、適所、適任の場づくりへの節目と素地をつくるために、心一つからの生き方と願っていながらも心ならずも心足りない一面を足さねば次へ進めないことを、仕組みの方から無言の催促・手助けをしてくれている。

○古今既成の人間社会集団につきものの、支配欲・征服欲・各種権力等の発生の余地を残さない仕組みとしての自動解任。

○居住地、職業や結婚その他、生活面全般にわたっての機会均等の土壌づくりとしての自動解任。

○世間での自分の持ち場にいつまでもしがみつき、責任感などで押しつぶされている様子を眺めるにつけ、やるべきことを、「ねばならない」から、やりたいからやる、やらしてもらおう心境態度への切りかわりで放して専念を確認する。

○他の動植物に見られるように、自動解任を節に、脱皮と生長をはかるために、経営方針や毎日の事柄も、その期の解任でさよならするものと新任するものとの分類整理してみる機会とする。

○そして改めて職場や仕事を放して、またつく前に、「任 役割につく」を自覚したい。